

坂本組

山元町

くま さく
熊の作遺跡

古代亶理郡 鉄生産の拠点

子弟

大原

信夫郡安良戸里人

大伴部志麻呂 大伴伴麻呂
大伴部志麻呂 大伴伴麻呂



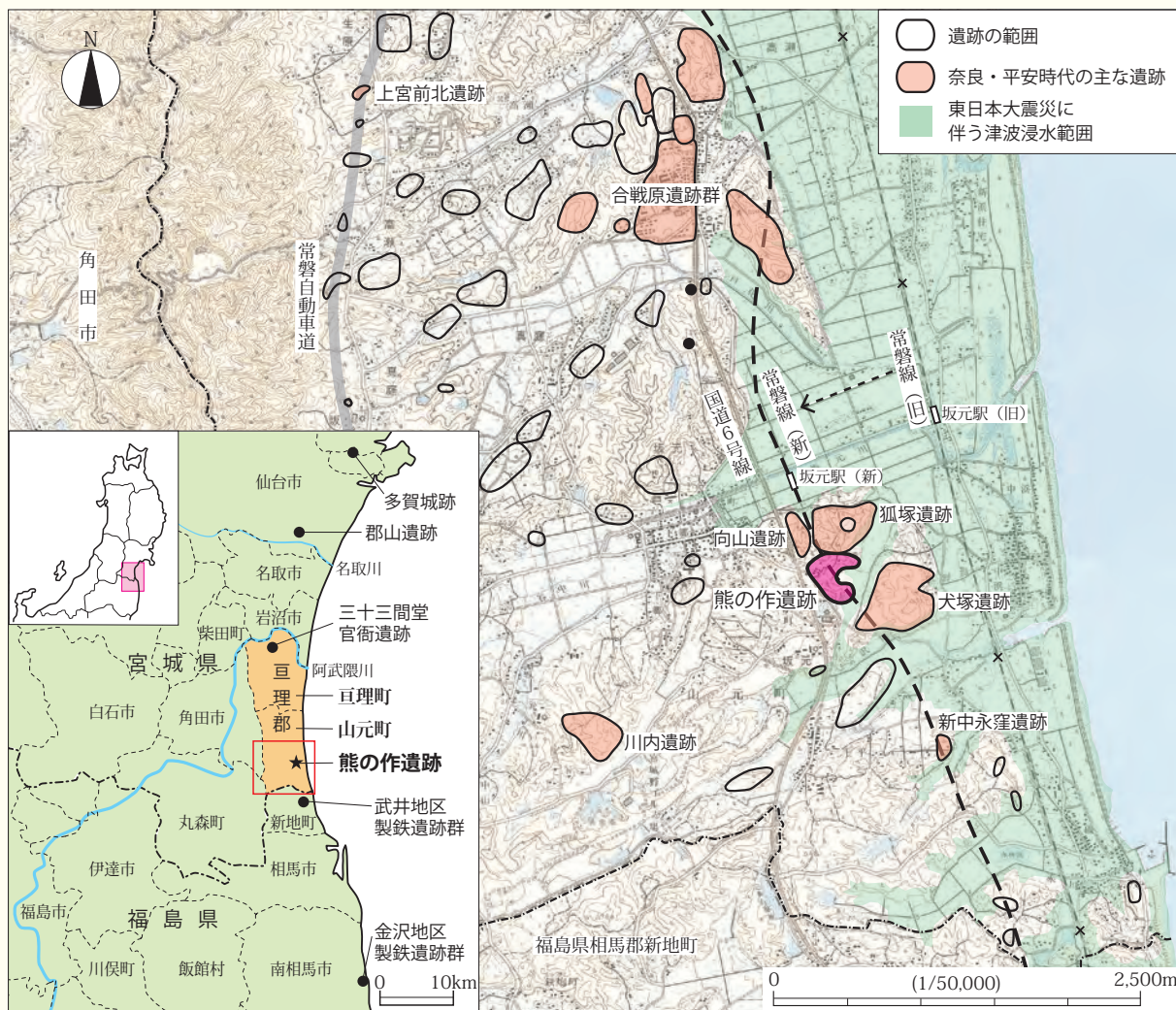
熊の作遺跡

熊の作遺跡は、宮城県南東部の^{わたり やまもと}亶理郡山元町にある、^{あすか なら へいあん}飛鳥・奈良・平安時代（7～9世紀ごろ）を中心とする遺跡です。福島県との境に近い町南部の^{さかもと}坂元地区にあり、現在の海岸線から約1.5km内陸に入った標高6～27mの丘陵に、^{きゅうりょう}東西300m、南北370mほどの範囲で広がっています。東日本大震災で不通となった^{じょうばん}JR常磐線の移設復旧に伴い、平成25年度から26年度（2013～2014年）にかけて発掘調査が行われ、奈良・平安時代の大型の掘立柱建物跡や材木堀跡などが見つかかり、土器、石製品、金属製品、木製品など多数の遺物が出土しました。それらの成果から、今まで知られていなかった^{かんが}官衙跡（役所跡）の存在が明らかになりました。

また、周辺の丘陵にある^{いづか}犬塚遺跡、^{しんなかなが}新中永

^{くぼ}窪遺跡、^{かつせんはら}合戦原遺跡群などでも発掘調査が行われ、奈良・平安時代に鉄を生産した^{せいてつろ}製鉄炉跡や、木炭や須恵器を生産した窯跡などが多数見つかっています。これらは、福島県相馬地方にある^{ぶい かねざわ}武井・金沢地区製鉄遺跡群などとともに、古代の一大工業地帯を形成していたと考えられます。

当時の東北地方（^{むつのおくに}陸奥国）では、^{りつりょう}律令国家が蝦夷の居住する北への支配を拡大し、関東地方などから多数の人々を送り込んでいました。そのため、大量の農具や武器などが必要となり、鉄の生産に力を入れていたと考えられます。そうした背景の中で、熊の作遺跡は亶理郡における生産を統括した拠点とみられる官衙跡です。



熊の作遺跡の位置

国土地理院発行 1/50,000 地形図「角田」「相馬中村」から作成

熊の作遺跡の変遷 ～集落から官衙へ～

熊の作遺跡は東側から入る沢によって、北側の丘陵（A地点）と南側の丘陵（B地点）に分かれます。ゆるやかな南斜面が広がるA地点を中心に多くの遺構が分布し、大きく3段階に変遷することが分かりました。

【I期】 飛鳥時代にはたてあな竪穴建物とはら掘立柱建物からなる集落が、A地点とB地点の丘陵の高い場所に営まれます。

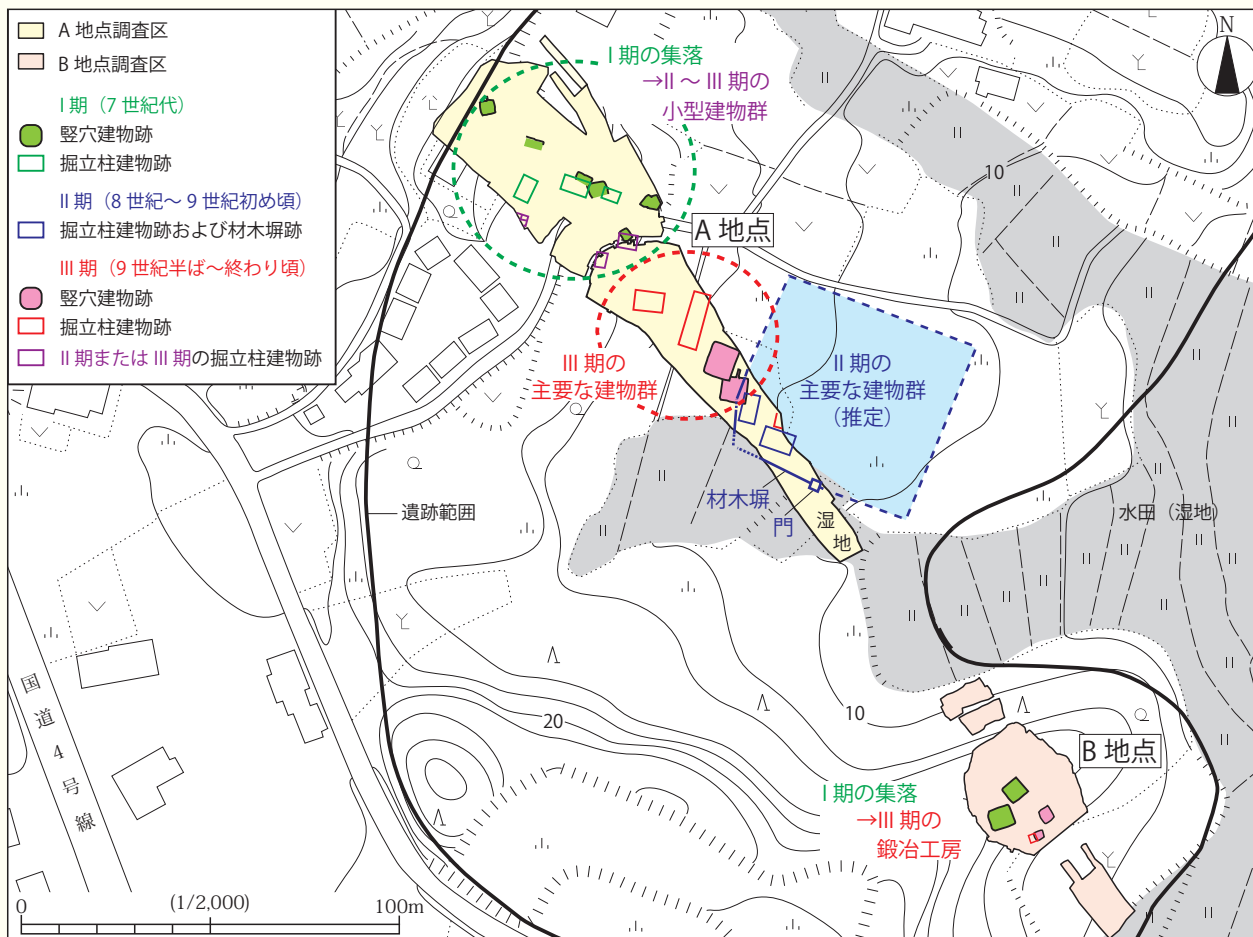
【II期】 奈良時代～平安時代初めごろには、A地点の沢に近いゆるやかな斜面に、大型の掘立柱建物がつくられます。それらは南西辺に門が開く材木ぼうけい堀で方形に囲まれており、その規模は一辺50mほどと推定されます。また、門の南側に広がる湿地からは、木簡しつちや墨書土器ぼくしょなどの文字史料を含む多数の遺物が出土しました。これらの遺構と遺物からみて、集落から官衙に変化したことがうかがえます。

す。なお、A地点でも丘陵の高いほうでは、倉庫などに使われたとみられる小型の掘立柱建物跡が見つっています。

【III期】 平安時代前期には、A地点の中央部に、大型の掘立柱建物と竪穴建物がつくれます。また、B地点で見つかった竪穴建物にはかじろ鍛冶炉があることから、鉄をせいれん精錬・加工したこうぼう工房跡と推定されます。



北西の上空からみた熊の作遺跡周辺



熊の作遺跡の全体図



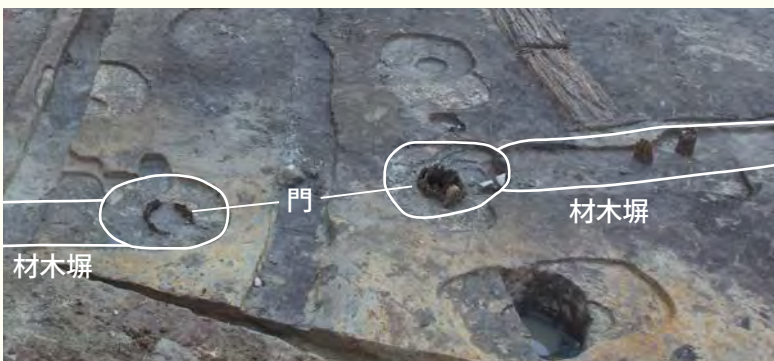
1 竪穴建物跡

地面を方形に掘りくぼめて床や壁をつくり、柱を立てて屋根をかけた一辺4mほどの建物で、当時の一般的な住まいでした。火事で焼失しており、屋根や柱に使った木材が炭になって出土しました。



2 低地に並ぶ材木堀跡の柱列

太さ15cmほどに加工された木材が、密に立て並べられていました。残っていたのは柱の根元部分だけですが、高さは2m以上あった可能性があります。



3 門の跡

材木堀の南西辺に、直径30cm以上の太い柱が2本立てられ、その間に門があったと考えられます。



門の柱 (直径38cm)



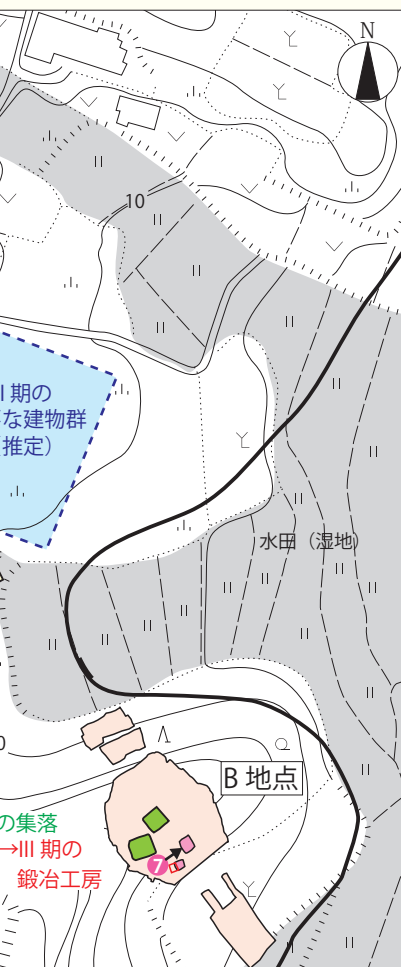
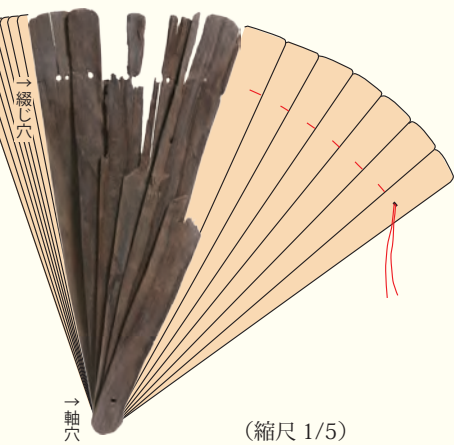
材木堀の柱

4-1 木製品の出土

門の南側に広がる湿地では、多数の遺物が出土しました。特に土の中では腐ってしまう木製品が、湿地の水分に守られて、約1300年前の状態のまま出土したのは貴重です。写真左は、扇ひおうぎの出土状況で、薄い板が6枚重なって見つかりました。長さ約28cmで、根元には軸穴、先端には綴じ穴が残っています。



4-2 木筒と墨書土器の出土状況



→詳細は6ページへ



Aの柱穴には直径27cm、長さ76cmのヒノキの柱が残っていました。その下には沈下を防ぐための板が敷かれていました。



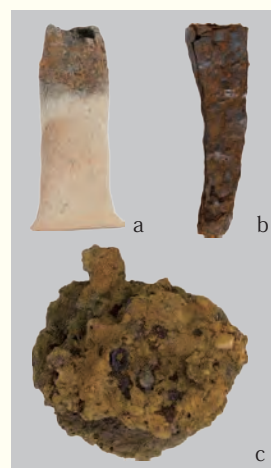
5 大型の掘立柱建物跡

一辺1m～1.5mの方形の穴に柱を立てたもので、東西4間(約8.5m)×南北3間(約5.4m)の規模の建物跡です。7世紀の竪穴建物跡(①)よりかなり大型で、材木堀で囲まれていることから、一般的な住まいではなく、役所などの建物跡と考えられます。



6 III期の建物群

掘立柱建物跡(写真手前)の規模は南北5間(14.7m)×東西2間(4.8m)で、竪穴建物跡(写真奥)は一辺の長さが約8mあります。どちらも一般的な集落の建物としては規模が大きく、有力者の住まいと、それに伴う調理施設(厨)の可能性がります。



7 鍛冶工房跡と出土遺物

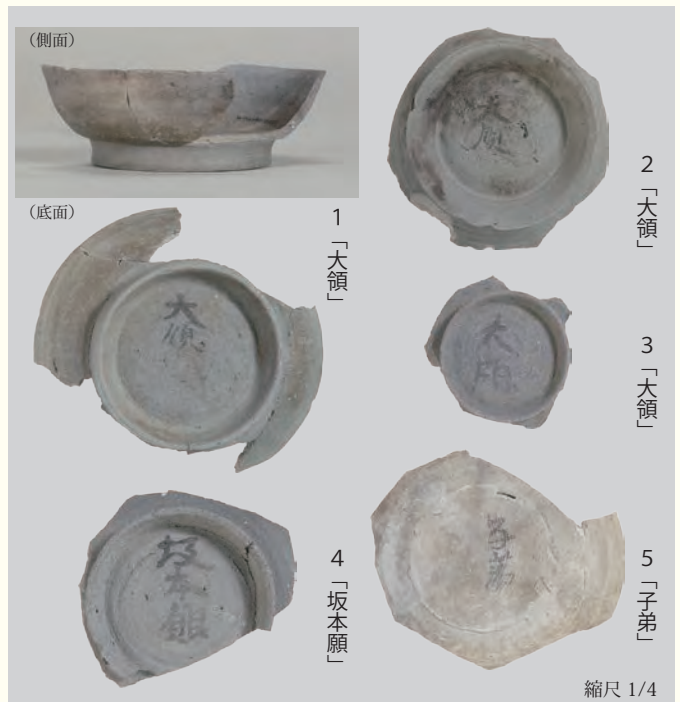
B地点の南斜面につくられた竪穴建物で、中央の黒い部分が鍛冶炉の跡です。羽口(a=土製の管)から炉に空気を送り込んで温度を上げ、鉄(b)と鉄滓(c=不純物のかたまり)に分けていました

(縮尺1/5)

出土した文字史料

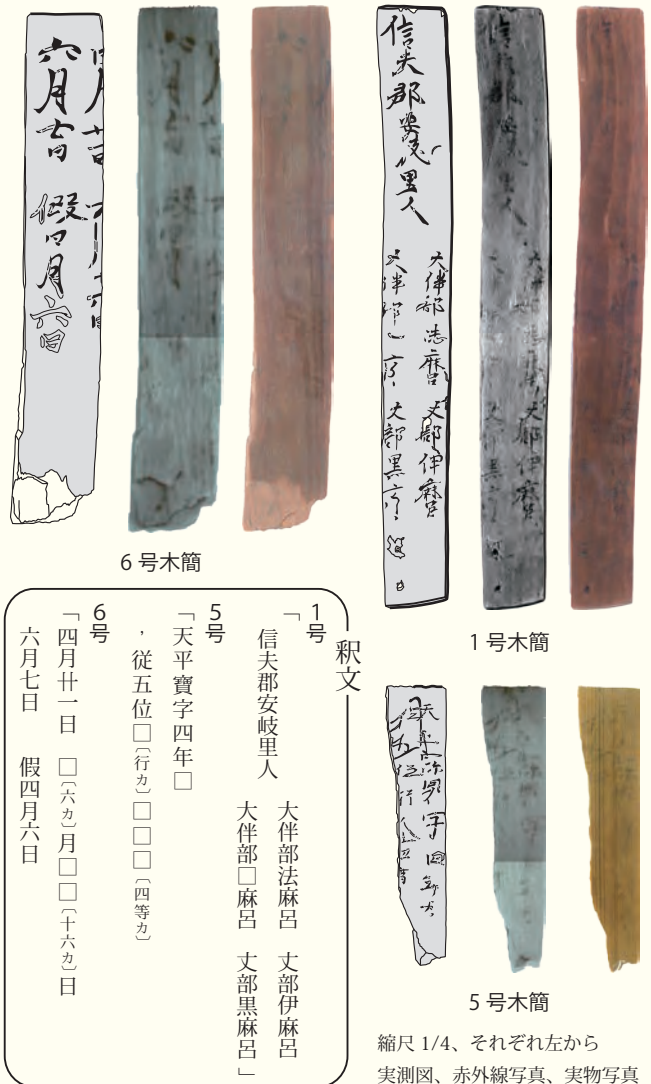
熊の作遺跡を特徴づけるものとして、文字史料の出土があります。

【墨書土器】 47点出土し、その多くは須恵器の坏（食器）の底に文字が書かれています。写真1～3の「大領」とは、当時の郡を治めた役人（郡司）の長官のことです。5の「子弟」は、郡司の子供や弟などを指します。これらの食器は、熊の作遺跡で亶理郡の大領や子弟のために用意されたものとみられます。4の「坂本」は、現在の坂元地区につながる地名です。当時の文献によると、亶理郡には4～5つの郷（ムラ）があり、そのうちの「坂本郷」がこの地にあったことを示しています。



【木簡】 主に短冊状の板に文字を書いたもので、役所の行政文書などに使われました。全部で9点出土しています。1号木簡にみえる「信夫郡安岐里」は、現在の福島県福島市と川俣町の境付近で、「郡」と「里」は奈良時代初めごろに使われていた行政区の単位です。熊の作遺跡から直線距離で約40kmも離れた信夫郡の「大伴部法麻呂」など4人の男性が、亶理郡にいたことを示します。5号木簡には「天平 寶字四年」（760年）の年代と、地方の役人としてはかなり高い「従五位」という官位が記されています。6号木簡は日付を書き並べたもので、「假」は役人の休暇を意味します。役人の出勤が熊の作遺跡で管理されていたことが分かります。

これらの文字史料から、熊の作遺跡では律令制にもとづく官位や暦が使われ、亶理郡のなかでも身分の高い役人が、人々を働かせていたことがうかがえます。



熊の作遺跡の墨書土器と木簡

周辺の生産遺跡（奈良時代）

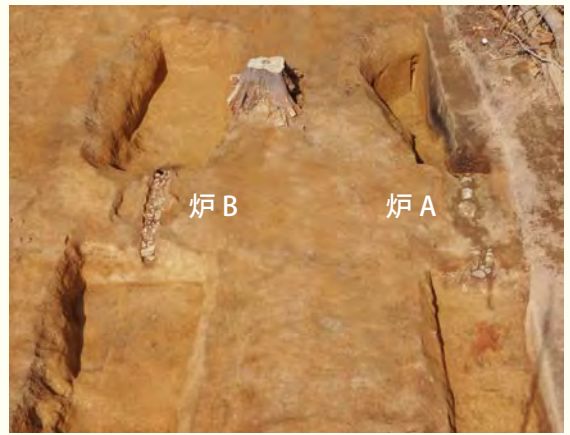
熊の作遺跡の周辺には、奈良・平安時代の生産遺跡が多くみられます。特に、海岸からとれる砂鉄を原料として、製鉄が盛んに行われていました。製鉄には燃料となる大量の木炭が必要なため、木炭を生産した窯跡も多数見つっています。

いぬづか 犬塚遺跡

熊の作遺跡の南側の丘陵にあり、奈良時代前半ごろとみられる製鉄炉跡が2基並んで見つかりました。炉は1.4m × 0.9mほどの長方形の「箱形炉」と推定され、防湿と保温のために、石が敷き詰められていました。炉の両側には、作業場とみられる長方形の穴が掘りこまれており、大量の鉄滓や木炭、焼けた土などで埋まっていた。出土した鉄滓はおよそ2.9トンに及び、炉から流れ出した形のまま固まったものが多くみられます。

しんなかながくぼ 新中永窪遺跡

熊の作遺跡から南東へ約1.5kmの丘陵にあり、斜面から製鉄炉跡1基、須恵器窯跡3基、木炭窯跡6基が密集して見つかりました。製鉄炉跡は「竪形炉」と呼ばれる円筒形の炉で、直径0.7m、高さ1.2mほどあります。「踏みふいご」という板を交互に踏んで、炉の中に空気を送り込んでいました（右下復元図）。須恵器窯と木炭窯は、斜面をトンネル状に掘ってつくられており、窯跡の中には須恵器の欠片や木炭が多数取り残されていました。奈良時代後半ごろを中心として、盛んに生産が行われていたことが分かります。



犬塚遺跡の製鉄炉



炉Bに敷き詰められた石



炉Aから流れ出した鉄滓



新中永窪遺跡の木炭窯跡（左）須恵器窯跡（右）製鉄炉跡（奥）※窯は天井がほぼ崩れた状態で見つかります。



窯跡に残された木炭（左）と須恵器片



製鉄炉跡（竪形炉）と復元図

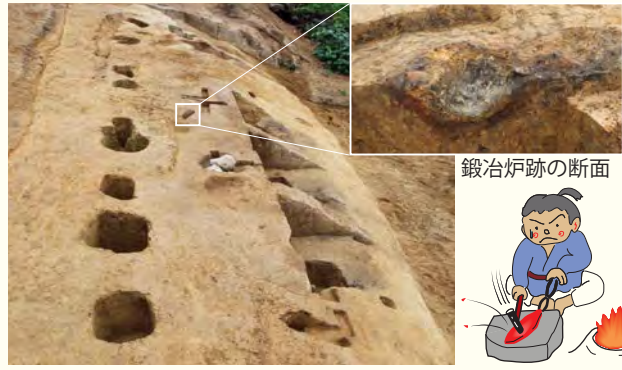


周辺の生産遺跡（平安時代）

平安時代になると、川内遺跡や上宮前北遺跡など、内陸部に製鉄遺跡がみられるようになります。奈良時代から製鉄が行われた海岸近くの丘陵では、大量の木炭が生産・消費され、木材が不足するようになった可能性があります。一方、熊の作遺跡や北側に隣接する向山遺跡では、平安時代の鍛冶工房跡が多数見つかっています（→5 ページ⑦）。内陸で生産された鉄が、熊の作遺跡周辺に運ばれて、精錬・加工されたことが考えられます。



上宮前北遺跡の製鉄炉跡
踏みふいごの付いた長方形（1.2 × 2.2m）の箱形炉です。



向山遺跡の鍛冶工房跡
斜面につくられた掘立柱建物で、内部に鍛冶炉がありました。

鍛冶炉跡の断面



まとめ ～熊の作遺跡と製鉄～

巨理郡内の官衙跡としては、北部の巨理町にある三十三間堂官衙遺跡（平安時代）が知られていましたが、熊の作遺跡の調査によって、奈良時代の官衙跡が巨理郡南部に存在したことが明らかになりました。奈良時代には、熊の作遺跡で大型の建物や木簡がみられるようになるとともに、周辺の遺跡で鉄などの生産が盛んになっており、その統括が熊の作遺跡の役割だったとみられます。1号木簡にみえる4人の男性も、製鉄などの労働に従事させるために信夫郡から送られたのかもしれませんが。そうした郡域を越えた人の移動には、巨理郡を一大工業地帯にする陸奥国の政策があったと考えられます。そして、平安時代に三十三間堂官衙遺跡が造られた後も、熊の作遺跡は引き続き鉄生産の拠点であったことがうかがえます。

関連年表

およそ～年前	時代	西 暦	主 な で き ご と
30,000年前	旧石器時代	645年	大化の改新
16,000年前	縄文時代	672年	壬申の乱
2,500年前	弥生時代	694年	藤原京に都を移す このころ郡山遺跡（仙台市）に多賀城以前の陸奥国府が置かれる
1,700年前	古墳時代	701年	大宝律令を施行する
1,400年前	飛鳥時代	710年	平城京に都を移す 【熊の作1号木簡】
1,300年前	奈良時代	724年	多賀城が創建される
1,200年前	平安時代	752年	東大寺の大仏が完成する
800年前	鎌倉時代	760年	桃生城（石巻市）が造られる 【熊の作5号木簡】
700年前	室町時代	774年	蝦夷が桃生城を襲撃し、38年におよぶ戦争がはじまる（～811）
400年前	江戸時代	780年	伊治公皆麻呂（これほりのきみあざる）の乱で、多賀城が炎上する
		794年	平安京に都を移す
		869年	陸奥国大地震（貞観地震）
		894年	遣唐使が中止される

編集・発行 宮城県教育庁文化財課

平成30(2018)年12月

〒980-8570 宮城県仙台市青葉区本町三丁目8番1号 電話 022(211)3684

<http://www.pref.miyagi.jp/soshiki/bunkazai/>



この冊子は1部あたり38円で印刷しています。
この冊子は再生紙を使用しています。